

看護学生と高齢者との世代間交流の効果と 活動内容についての文献研究

仁平 利沙^{*1} 渡辺 陽子^{*2} 品川 祐子^{*2} 山中 道代^{*2}

*1 独立行政法人国立病院機構福山医療センター

*2 県立広島大学保健福祉学部保健福祉学科看護学コース

2021年8月31日受付

2021年12月16日受理

抄 録

看護学生と地域高齢者との世代間交流の効果と活動内容による効果の違いを明らかにすることを目的として、文献検討を行った。検索語は「高齢者」「看護学生」「交流」と「地域」「高齢者」「看護学生」「交流」の組み合わせで、検索年は2005年から2020年とした。8文献から交流効果の記述を抽出し質的統合を行った。看護学生の交流効果は【活動を通して高齢者の強さを感じることができる】など6カテゴリ、高齢者は【高齢者自身が有用感を抱く機会となる】など3カテゴリであった。活動内容別の効果としては、看護学生が自ら地域に出向き参加する活動、高齢者の健康支援や協働活動で、地域活動への理解が深まっていた。活動内容に関わらず高齢者の強さへの気づきを得ていた。高齢者は、学生に知識や経験を伝える活動や協働する活動から有用感や健康への期待を感じていた。世代間交流の場を設ける際には、目的に合わせて内容を企画することでより効果的な交流の場となると考える。

キーワード：地域高齢者，看護学生，世代間交流，効果

1. 緒言

2019年の統計では、65歳以上の高齢者は3588万人で前年の3556万人に比べ32万人増加し、総人口に占める割合は28.4%と前年より0.3ポイント上昇し、過去最高となっている¹⁾。高齢化やライフスタイルの変化等から起こる単身世帯の増加、核家族化といった家族形態の変化により、子どもは、家庭や地域で様々な世代の人と交流する機会が減少し、異世代間の交流を通じて得られる人間性の成長や人間関係の構築など多様な視点から自己を見つめるといった機会が減少してきている²⁾。一方で高齢者には、定年後、地域の人と関わりながら暮らす期間が延長する中で、地域生活の中で今までに得てきた経験を活かすこと、知恵を語る場を持つことが望まれている。このような状況の中で現在は、地域における世代間交流や世代間協働の大切さが見直されてきている^{2) 3)}。

世代間交流とは、「子ども、青年、中・高年世代の者がお互いに自分達の持っている能力や技術を出し合って、自分自身の向上と、自分の周りの人々や社会に役に立つような健全な地域づくりを実践する活動で、一人一人が活動の主役になること」⁴⁾である。佐藤⁵⁾は、子ども世代の高齢者との交流経験の不足について、「子ども世代は高齢者世代との間のダイナミックな相互依存関係を通して高齢者の身体的、心理的、社会的状況を適切に評価しにくい状況におかれている。」と指摘している。看護学生は、臨地実習等で高齢者と接する機会が多く、卒業後は地域における看護の担い手として重要な役割が期待されるため、大学在学中から高齢者に対してより肯定的なイメージがもてるような取り組みが必要となる⁶⁾。加えて看護学生が将来、高齢者のニーズを適切に捉えることのできる高齢者看護の実践者となるためには、多様な価値観を持つ高齢者を多角的側面からアセスメントする力を得て、「生活者」として高齢者を理解することが望まれる。先行研究では、看護学生が地域高齢者と交流することで、高齢者の多様性や個性に対する理解が深まることや、高齢者のたくましさ、生き生きとした姿を感じていたこと⁶⁾、自分自身の学びの再確認などの様々な効果が得られること⁷⁾が明らかにされている。さらに張らの研究⁷⁾では、看護学生との世代間交流は、高齢者側にとっては「看護学生への理解と期待」「看護学生への継承」などを感じる事が明らかにされており、世代間交流は看護学生と高齢者の双方にとって効果的な活動であるといえる。

看護基礎教育の中で世代間交流の機会を設ける際には、教育目的に応じて活動内容を検討する必要があると考えるが、先行研究では、活動内容による効果の違いについては検討されていなかった。そこで本研究では、看護学生あるいは地域で生活する高齢者にとって

の世代間交流の効果について検討した研究に焦点をあて、双方の効果と、活動内容による効果の違いを明らかにしたいと考えた。本研究の結果は、地域創生社会の実現に向け、高齢者の多様性を理解し、高齢者のニーズに沿った支援を実践することのできる看護職の育成に向けた教育方法の示唆を得ることにつながると考える。

2. 研究目的

本研究の目的は、次の2点である。

- ① 看護学生と高齢者との世代間交流の効果、看護学生と高齢者双方の視点から明らかにする。
- ② 看護学生と高齢者双方の効果、活動内容による違いから検討する。

3. 研究方法

3-1 対象となる文献の抽出

医学中央雑誌 Web 版では、検索キーワード「高齢者」「看護学生」「交流」の組み合わせ及び「本文あり」「原著論文」「会議録除く」で絞り、24論文が抽出された。また CiNii では、検索キーワード「地域」「高齢者」「交流」「看護学生」の組み合わせ及び「本文あり」で絞り、13論文が抽出された。さらに2005年が介護保険法の改正による地域包括ケアという考え方を踏まえた地域密着型サービスの創設や、予防重視型システムへの転換等が開始された年であることから⁸⁾、検索対象年を2005年から2020年とした。その中から地域高齢者を対象としたもの、看護学生との交流が主であるものを、2つのデータベースから同じ論文を抽出しないよう選択した。実践報告も、活動内容が具体的に書かれているもの、結果の中に看護学生あるいは高齢者の学びや気づきの記述があるものは対象論文に含み、最終的に8件の論文を分析対象とした。論文名と世代間交流の活動への参加者、各論文で報告されていた活動内容を表1に示す。

3-2 分析方法

高齢者と看護学生との世代間交流として行われていた活動から、「健康増進の支援」など活動の要素を挙げ、当該論文で行われていた世代間交流の活動内容として整理した(表1)。

対象文献を精読し、「世代間交流の成果」として看護学生及び高齢者が相互交流を通して感じた効果(気づき、感想も含む)を抽出し、看護学生への効果と高齢者への効果に分類した。その後内容の類似性で分類し、質的統合を行った。具体的には、質的分析された結果からは、世代間交流の効果を表しているサブカテゴリや分類名を抽出した。質問紙では自由記載から効

表 1. 活動の参加者と属性・活動内容の一覧^{2) 6) 9) ~ 14)}

論文番号・論文名	活動の参加者		活動内容	活動内容の分類
	高齢者	看護学生		
① 学生と地域を繋ぐプロジェクト ⁹⁾	60～90代の高齢者, 延べ184名	看護系大学1～4年次生, 延べ84名	<ul style="list-style-type: none"> 介護予防教室「クロスエイジング」の, 看護学生による企画運営と参加 認知症の人と繋いでマラソンを行う「RUN 伴+」にチームとして参加 	A: 看護学生が地域資源となる活動
② 山間地域在住の高齢者との交流における看護学生の世代性及び対人援助力への影響 ¹⁰⁾	70～80歳代を中心とした10～20名の60歳以上高齢者	看護系大学2年次生で老年看護学概論を履修し, 高齢者との交流授業に出席した学生	<ul style="list-style-type: none"> ゲートボール・ゲーム 看護学生の血圧測定 地区の歴史やこれまでの地域の活動, 研究成果の報告 ご自宅訪問 しば餅づくり 座談会 地区サロン訪問 民俗資料館見学・説明 	E: 複数の要素を含む活動 (A, B, D)
③ 地域の高齢者と大学生による異世代間交流 ²⁾	地域のシニアクラブの高齢者16～22名	看護系大学看護学科の学生17～21名	<ul style="list-style-type: none"> 料理教室 AED (スマートフォン) の使い方 地域の防災マップの作成 	D: 高齢者と看護学生との協働活動
④ 地域高齢者と看護学生の世代間交流に関する研究 ¹¹⁾	高齢者20名前後 / 回 3年間総数252名 (70歳代が159名で最多)	看護系大学看護学科学生総数74名 20歳前後	<ul style="list-style-type: none"> “友達ゲーム”として昔遊び(合唱と郷土かるた)とセルフマッサージの演習 “いきいきトーク”自分の生きがい・健康法の語り合い 	E: 複数の要素を含む活動 (B, D)
⑤ 看護大学生の高齢者に対するエイジズムとイメージの変化 ¹²⁾	地域に在住している高齢者 (人数記載なし)	看護系大学学生1～3年生20名	<ul style="list-style-type: none"> 月2回の文通 お菓子作り 健康体操 カラオケ 	E: 複数の要素を含む活動 (B, D)
⑥ 地域高齢者と看護学生及び児童との世代間交流プログラムの実践報告 ⁶⁾	第1回目交流会: 老人クラブの75歳以上の高齢者6名 (男2/女4) 第2回目交流会: 老人クラブの75歳以上の高齢者8名 (男2/女6)	第1回目の交流会: A 大学看護学科3年生13名 (児童23名) 第2回目の交流会: 看護学生6名 (児童不参加)	<ul style="list-style-type: none"> カード集めゲーム, 果物入れゲーム, 何ができるかな, 紙飛行機の作成と飛行 市の名所や旧跡について看護学生がパワーポイントを作成し, 高齢者がそれを見ながら説明する 	D: 高齢者と看護学生との協働活動
⑦ 看護学生・高齢者世代間交流による相互学習の取り組みの効果 ¹³⁾	A市地域居住高齢者8名 (70代7名, 80代1名)	看護系大学保健看護学科に在籍し, 老年看護学Iを受講した大学生92名 (19～21歳)	<ul style="list-style-type: none"> 地域高齢者が授業に参加し, 看護学生が高齢者に対するライフヒストリーインタビューを実施 	C: 高齢者が看護学生の学修に協力する活動
⑧ ITを活用した山間地域の在宅高齢者と看護学生とのコミュニケーション ¹⁴⁾	(記載なし)	医療情報Aの授業において「まごころネット」へ参加した短期大学看護学科2年生62名	<ul style="list-style-type: none"> 健康・生活相談に関するソフト「まごころネット」に学生がアクセスして, 高齢者と交流 	B: 看護学生が高齢者の健康増進を支援する活動

※活動内容の分類の項「E: 複数の要素を含む活動」の後の()は, A～Dの活動内容のうち含まれる要素を示している。

果を最もよく示している記述を選択して抽出し、交流後に学生が作成したレポートの概要などからは意味内容を変えないように学びや気づきについての記述を抽出した。実践報告では、交流による看護学生あるいは高齢者の学びや気づきについての記述を抽出した(表2, 表3)。

次に活動内容で論文を分類し、活動内容を横列、効果のカテゴリを縦列として表に整理し、該当するカテゴリがある場合に「○」を付し、活動内容による効果の違いを検討した(表4)。

4. 結果

4-1 活動内容

高齢者と看護学生との世代間交流として行われていた活動内容を『』で示し、内訳を()で示す(表1)。

地域高齢者と看護学生が相互交流を行う活動内容は、『A: 看護学生が地域資源となる活動』(1件)、『B: 看護学生が高齢者の健康増進を支援する活動』(1件)、『C: 高齢者が看護学生の学修に協力する活動』(1件)、『D: 高齢者と看護学生との協働活動』(2件)、『E: 複数の要素を含む活動』(3件)の5つにわけられた。看護学生が地域活動のメンバーとして参加するなど、より主体的に地域と関わる活動は、『A: 看護学生が地域資源となる活動』とした。看護学生が学修した知識や技術を用いて、在宅生活する高齢者の健康支援を行う活動は『B: 看護学生が高齢者の健康増進を支援する活動』とした。高齢者が大学内で行われる看護学生の演習に参加し学修に協力する活動は『C: 高齢者が看護学生の学修に協力する活動』とした。高齢者は料理を学生に伝え、学生は電子機器の使い方などを高齢者に伝えるというお互いの強みを活かした交流や、両者で地域の防災マップを作成する、一緒にレクリエーションを行うなどの活動は『D: 高齢者と看護学生の協働活動』とした。一つの交流活動の中に、月に2回の文通やお菓子作りといった『D』の活動と、健康体操などの『B』が含まれる活動などは、『E: 複数の要素を含む活動』とした。8件中3件が複数の要素を含んでおり、うち2件が『B』『D』、1件が『A』『B』『D』を含む活動であった。

4-2 看護学生側の効果

世代間交流による看護学生側の効果を表2に示し、カテゴリを【】、サブカテゴリを〈〉、記述を「」で示す。なお記述の「」内の()は、対象文献から抽出したサブカテゴリを示すコードの抜粋である。

【看護学生が人(地域)同士のつながりについて知る機会となる】は〈療養者の家族を支える場が必要であると気づく〉〈療養者やその家族を知ることが大切

であると気づく〉〈人(地域)のつながりや支えが大切であると気づく〉の3サブカテゴリで構成された。「人(地域)のつながりの深さやみんなで見守る必要性を感じた」「地域での高齢者の見守り(定期的にやり取りをしている中で、返信が来ないと何かあったんだろうか、となる)」など、地域同士での支えあいの大切さについての気づきであった。

【看護学生(看護職)が地域に出向くことの必要性に気づく】は〈地域の概要やその地域特有の課題について知る〉〈地域と看護学生の関係が構築される〉〈地域での継続的な支援の重要性に気づく〉の3サブカテゴリで構成された。「地域に密着した看護活動(地域特有の病気や生活習慣が分かりやすくなると思う)」「地域との関係構築(演習に来られた地域の方の生活や地域の方の気持ちが見えた)」など、看護学生(看護職)が地域に出てこそ得られることがある、との気づきであった。

【地域全体での取り組みが高齢者の健康の維持増進につながる】は〈地域全体で健康意識を高めることが大切であると気づく〉〈地域活動が高齢者の生きがいづくりにつながることに気づく〉〈高齢者の力を生かすことの必要性に気づく〉の3サブカテゴリで構成された。「地域全体の健康意識の向上(地域全体の健康意識の向上にもつながっていく)」「このような場を増やすことで地域全体が盛り上がると思う」など、健康の維持増進に向けた地域の力の必要性への気づきであった。

【活動を通して高齢者の強さを感じることができる】は〈地域で暮らす高齢者は元気で活動的であると気づく〉〈高齢者は加齢に伴う変化や疾病を受け入れる努力をしながら、さらに楽しみを見つけて生活している〉〈高齢者は健康に対する関心が高いということに気づく〉〈様々な人生経験があるからこそ英知が得られると気づく〉の4サブカテゴリで構成された。「身体の変化を受け入れ、そのうえで生き生きとされる姿を見ることができた」「人生経験からの英知(色々な経験をしているから言える人生論などの生きざまが見え、私たちの人生の勉強になった)」など、高齢者の持つ強さに対する気づきであった。

【活動を通して高齢者の個性を知ることができる】は〈地域で暮らす高齢者の多様性に気づく〉〈高齢者と自分たちとの違いを知る〉〈高齢者の生活や地域への思いを知る〉〈高齢者に対するイメージが変化する〉の4サブカテゴリで構成された。「高齢者のとらえ方の変化(様々な高齢者がいる、固定観念を抱くことはよくない)」「社会性の発見(話しかけると気さくに喋ってくれた)」など、様々な高齢者との交流による個性への気づきであった。

【看護学生が高齢者との交流から学び、交流してこそ分かる】は〈看護学生が対話を

表 2. 看護学生の効果

カテゴリ (論文数)	サブカテゴリ	記述 ○ 論文番号, () 対象論文のコードの例*	
看護学生が人 (地域) 同士の つながりに ついて知る機 会となる (3)	療養者の家族を支える 場が必要であると気づく	家族会という居場所があるのを知らなかった ①	
	療養者やその家族を知 ることが大切であると 気づく	当事者や家族の方のことをもっと知ってほしい ① 病気による辛さや当事者のことを知れた ①	
	人(地域)のつながり や支えが大切であると 気づく		人(地域)のつながりの深さやみんなで見守る必要性を感じた ①
			社会性の維持(学生, 施設スタッフ, 利用者間の交流の大切さを学んだ) ⑤
			高齢者同士の交流の場(高齢者同士の交流の場ともなる) ⑧
			積極的な地域とのつながり(まごころネットは積極的に地域とのつながりをとっている活動) ⑧
			地域での高齢者の見守り(定期的にやり取りをしている中で, 返信が来ないと何かあったんだろうか, となる) ⑧
地域での信頼関係(医療に関するだけでなく地域や日常生活の話は互いの関係を良くし信頼関係へとつながる) ⑧			
積極的な地域とのつながり(まごころネットは積極的に地域とのつながりを持っている活動である) ⑧			
看護学生(看護職)が地域 に出向くこと の必要性に気づく (7)	地域の概要やその地域 特有の課題について知る	生活している地域を知った①	
		大学周辺の地域に関心を持った③	
		地域の情報を得ることができ, 活性化について考えた⑥	
		地域の歴史について分かりやすい説明をして下さった⑥	
		地域に密着した看護活動(地域特有の病気や生活習慣が分かりやすくなると思う) ⑧	
	医療とスーパーへのアクセスの不便さ, 車がないことの不便さ, 若者世代が少なく地域の催し物をするための若者人材への希求, 坂が多く歩行の困難さ, 災害時の孤立化への不安などを高齢者との対話から認識していた②		
	地域と看護学生の関係 が構築される	若者への期待(元気・刺激を求めている) ①	
		挨拶を交わすようになった ③	
		地域の清掃活動ボランティアに参加するようになった③	
		交流により一体感を感じることができた④	
学生と関わることで地域活性につながり文化などを継続できる⑥ 高齢者も学生の関わりで知っていることを教えてあげようという気持ちも高まり, 生きがいの一つになると感じる⑥ 異世代交流(社会状況について世代を超えて情報交換できる) ⑧ 地域との関係構築(演習に来られた地域の方の生活や地域の方の気持ちが見えた) ⑧			
地域での継続的な支援 の重要性に気づく	地域看護の役割や重要性(病院における看護だけでなく, 地域看護の役割や重要性についても学ぶことができた) ⑧		
	地域活動としての普及へ(より多くの高齢者やその家族の人たちに活動を知ってもらうことが必要で, 広がってほしい) ⑧		
地域全体での 取り組みが高 齢者の健康の 維持増進につ ながると気づく (3)	疾病予防(看護活動が広がり疾病予防に取り組んでいける) ⑧		
	地域全体で健康意識を高めることが大切であると気づく		
	地域活動が高齢者の生きがいがづくりにつながることに気づく		
	高齢者の力を活かすことの必要性に気づく		
		地域全体の健康意識の向上(地域全体の健康意識の向上にもつながっていく) ⑧ 地域での連携(地域の方がより健康に生活できるようにするには, 市や病院, 学校の連携協力が大切) ⑧ 高齢者の生きがいがづくりにつながる(活動が生きがいがづくりにつながる) ⑤ 地域の高齢者の生きがい(地域の高齢者たちの生きがいにつながる地域活動である) ⑧ 高齢者の経験を活かした社会活動の必要性が知れた⑥ このような場を増やすことで地域全体が盛り上がると思う⑥	

表 2. 看護学生の効果 (つづき)

カテゴリ (論文数)	サブカテゴリ	記述 ○ 論文番号, () 対象論文のコードの例*			
活動を通して 高齢者の強さ を感じることが できる (5)	地域で暮らす高齢者は 元気で活動的であると 気づく	高齢であっても元気で動くことができる人が多い ① 皆さん元気で若者より活気を感じた ① とても活動的であると感じた ⑥ 経験豊富でたくましい雰囲気が感じられた ⑥ 何でも行動に移している様子がみられたから ⑥			
	高齢者は加齢に伴う変 化や疾病を受け入れる 努力をしながら、さら に楽しみを見つけて生 活している	笑顔で楽しみを見つけると楽しく生活できることが分かった ⑥ 身体の変化を受け入れ、そのうえで生き生きとされる姿を見ることが できた ⑥ 身体の衰えに負けず元気な姿を見て、理想的と感じた ⑥ 歳を重ねても元気でまだまだ楽しめることがある ⑥			
	高齢者は健康に対する 関心が高いということ に気づく	健康への関心が高かった④ どのようにすれば健康でいられるかの知識が豊富 ⑥			
	様々な人生経験がある からこそ英知が得られ ると気づく	人生経験からの英知 (色々な経験をしているから言える人生論などの 生きざまが見え、私たちの人生の勉強になった) ⑦ 充実した生活 (若いころからの積み重ねがあったからこそ、今に生か していける) ⑦ 高齢者からの知恵 (地域のことや生活に関する知恵などを教えて頂け る) ⑧			
	活動を通して 高齢者の個別 性を知ること ができる (5)	地域で暮らす高齢者の 多様性に気づく	元気な方だけでなく耳の遠い方や足の悪い方も参加していた ① 実習に行くと高齢者多いが健康な方との違いがあった① 高齢者の多様性の理解 (家庭での様子が分かった) ① 地域の高齢者の理解が深まった④ 高齢者の時代背景の理解 (昔流行したものやライフスタイルについて 知ることができた) ⑤ 高齢者の人生観・価値観の理解 (それぞれ長い間生きてきた人生があり、 価値観があることを学んだ) ⑤ 高齢者の心身の特徴理解 (意外な喜怒哀楽の発見) ⑤ 今まで生きてきた中での価値観などが違う ⑥ 家に閉じこもっている人もいれば、交流に出ている人もいる⑥ 個人差がある (高齢者をひとくりにしていたが、個人差があること が分かり失礼だった) ⑦ 身体機能の変化 (高齢者は皆が身体が弱いわけではない) ⑦ 高齢者のとらえ方の変化 (様々な高齢者がいる、固定観念を抱くこと はよくない) ⑦		
			高齢者と自分たちとの 違いを知る	自分たちが普通にできることでも高齢者はつらそう ⑥	
			高齢者の生活や地域へ の思いを知る	家庭での様子が分かった① 若い人への関心が高かった④ 地域や若者のことを大切にしていることが伝わった⑥ 日常生活についての情報を得た⑥	
			高齢者に対するイメー ジが変化する	高齢者のイメージがプラスに変化した④ 積極性への驚き (高齢者の本気で取り組む姿勢に驚いた) ⑤ 社会性の発見 (話しかけると気さくに喋ってくれた) ⑤ 明るいイメージへの変化 (活動に参加して明るいイメージが変わった) ⑤	
			看護学生が高 齢者との交流 から学び、交 流してこそ分 かることがあ ると気づく (6)	看護学生が対話を通し て高齢者を理解する	バイタルサイン測定や対話の中から交流前の学修生活では想像できな かった事象に対する驚きと、困難感、喜びや楽しさ、新たな発見など を記載していた②
					(高齢者の) 温かさへの感動 (自分の事を覚えてくれていて、より一層 親近感がわいた) ⑤
生活史の理解 (今やっておいた方が良いことやこの時代に生きている ことを幸せに思っしてほしいと伝えられ、人生に悔いなく生きる事を学 びもっとと老年者と関わりたいと思った) ⑦					

表 2. 看護学生の効果 (つづき)

カテゴリ (論文数)	サブカテゴリ	記述 ○ 論文番号, () 対象論文のコードの例*
	看護学生が高齢者とのコミュニケーションにおいて大切なことを学ぶ	高齢者からの知見の活かし方 (昔の体験は関係ないと思っていたが改めて聞くと今の暮らしが恵まれている) ⑦
		高齢者への対応の仕方が学べた④
		コミュニケーション力が身についた④
		高齢者は交流したいと望んでいる④
		コミュニケーション技術の重要性 (目線や話すスピードへの配慮) ⑤
		傾聴の大切さ (話を聴く姿勢と尊敬の念をもつ, どのような人生を生きてきたか, 望みは何かを理解することが大切) ⑦
		地域の高齢者とのコミュニケーション (場や道具を活用する方法や話題や提供の仕方など関わっていける方法を学べた) ⑧
	失礼のない文章 (相手に失礼のないようにやり取りをする) ⑧	
看護学生がこれまでの関わりについて考える	自分が今まで行ってきた関わりを, 改善する気持ちになった ⑥	

※サブカテゴリからの抽出で, 対象文献内にコード (具体的記述) の記載がある場合は, () 内にコード (具体的記述) の抜粋を示した。

表 3. 高齢者の効果

カテゴリ (論文数)	サブカテゴリ	記述 ○ 論文番号, () 対象論文のコードの例*
高齢者自身が有用感を抱く機会となる (2)	人生の歩みに対する自己肯定につながる	人生の歩みの自己肯定感 (学生のライフインタビューからの学びの発表を聞いて, 個人として自分が行ってきたことが間違いでない) ⑦
	活動を通して若者を育てたいと思う	今後も授業に参加していきたい (自分が元気なうちは, 協力していかないと, 面倒は見えてあげたいと思う) ⑦
		大学と協力して地域で学生さんを育てていきたい ③
高齢者自身が健康への期待ができる (4)	活動を通して健康づくりができる	(健康に関して) 他の人と意見交換できたこと ④
		元気でいたい④
		勉強になる④
		かるたや歌で脳が活性化されたこと ④
	活動を通して若者から元気をもらえる, 楽しい	話し合いはいい, 声を出すから④
		学生さんと関わって元気をもらいたい ③
		若い学生との交流で若さをもらったこと ④
		若さや元気をもらった④
		とても楽しかった, また交流をお願いしたい ①
		エネルギーを沢山もらった①
若者に対する理解が深まる (2)	若者に対するイメージが変化する	気持ちが若くなった気がする①
		家では老人ばかりなので, 若い人とのコミュニケーションができて楽しかった①
	若者への理解が深まる	子どもにかえて楽しくできた。久しぶりに夢中になった①
		若者と接する楽しさ (もう私たちは若い人と話す機会がない) ⑦

※サブカテゴリからの抽出で, 対象文献内にコード (具体的記述) の記載がある場合は, () 内にコード (具体的記述) の抜粋を示した。

通して高齢者を理解する)〈看護学生が高齢者とのコミュニケーションにおいて大切なことを学ぶ〉〈看護学生がこれまでの関わりについて考える〉の3サブカテゴリで構成された。「交流を持つことの大切さ (高齢者と距離を置いていたが, もっと気さくに話せばよ

かった。親と違った安心感があった)」など相互交流による高齢者に対する理解の深まりや, 「自分が今まで行ってきた関わりを, 改善する気持ちになった」と自分の関わりを内省していた。

4-3 高齢者側の効果

高齢者側の効果を、表3に示す。【高齢者自身が有用感を抱く機会となる】は、〈人生の歩みに対する自己肯定につながる〉〈活動を通して若者を育てたいと思う〉の2サブカテゴリで構成された。「大学と協力して地域で学生さんを育てていきたい」など、交流を通して若者を育てていきたい、と感じていた。

【高齢者自身が健康への期待ができる】は、〈活動を通して健康づくりができる〉〈活動を通して若者から元気をもらえる、楽しい〉の2サブカテゴリで構成された。「家では老人ばかりなので、若い人とのコミュニケーションができて楽しかった」など、若い世代との関わりが、自身の健康につながると感じていた。

【若者に対する理解が深まる】は、〈若者に対するイメージが変化する〉〈若者への理解が深まる〉の2サブカテゴリで構成された。「分かりやすく教えてくれた」など、交流を通して若い世代に対する良いイメージを感じていた。

4-4 活動内容による効果の分類

活動内容ごとの効果の分類を表4に示す。『A: 看護

学生が地域資源となる活動』では、【看護学生が人（地域）同士のつながりについて知る機会となる】【看護学生（看護職）が地域に出向くことの必要性に気づく】など、地域活動についての理解が深まり、看護学生（看護職）が自ら地域に出ることの大切さについての気づきがあった。『B: 看護学生が高齢者の健康増進を支援する活動』では地域に対する理解や、【看護学生が高齢者との交流から学び、交流してこそ分かることがあると気づく】などに加えて、【地域全体での取り組みが高齢者の健康の維持増進につながると気づく】といった、高齢者の健康の維持増進に向けた地域活動の大切さへの気づきも得られていた。高齢者が大学の授業に参加して行われていた『C: 高齢者が看護学生の学修に協力する活動』では、高齢者の強さや個別性への気づきを得られていた。『D: 高齢者と看護学生との協働活動』や『E: 複数の要素を含む活動』は、地域への理解、高齢者の強さや個別性への気づき、地域全体での取り組みの必要性への気づきがあった。【活動を通して高齢者の強さを感じることができる】という気づきは、すべての活動で得られていた。

高齢者は、『C: 高齢者が看護学生の学修に協力する

表4. 活動内容による効果の分類と記述数

カテゴリ名	活動（論文番号）				
	A: 看護学生が地域資源となる活動 ①*	B: 看護学生が高齢者の健康増進を支援する活動 ⑧	C: 高齢者が看護学生の学修に協力する活動 ⑦*	D: 高齢者と看護学生との協働活動 ③*, ⑥	E: 複数の要素を含む活動 ②, ④*, ⑤
看護学生側の効果	看護学生が人（地域）同士のつながりについて知る機会となる	○	○		○
	看護学生（看護職）が地域に出向くことの必要性に気づく	○	○		○
	地域全体での取り組みが高齢者の健康の維持増進につながると気づく		○		○
	活動を通して高齢者の強さを感じることができる	○	○	○	○
	活動を通して高齢者の個別性を知ることができる	○		○	○
	看護学生が高齢者との交流から学び、交流してこそ分かることがあると気づく		○	○	○
高齢者側の効果	高齢者自身が有用感を抱く機会となる			○	
	高齢者自身が健康への期待ができる	○		○	○
	若者に対する理解が深まる			○	○

※調査対象者が看護学生と高齢者 他は対象者が看護学生のみ

活動』『D: 高齢者と看護学生との協働活動』で、【高齢者自身が有用感を抱く機会となる】【高齢者自身が健康への期待ができる】【若者に対する理解が深まる】と感じていた。

5. 考察

本研究では、世代間交流の効果や活動内容による効果の違いを明らかにすることを目的として、文献検討を行った。看護学生と高齢者との世代間交流の効果、活動内容による効果の違いについて考察する。

5-1 世代間交流で看護学生・高齢者が受ける効果

看護学生側の効果については、地域で生活する高齢者と交流し、【看護学生が人（地域）同士のつながりについて知る機会となる】ことによって、地域社会での人と人とのつながりの大切さや生活環境に対する理解が深まり、【看護学生（看護職）が地域に出向くことの必要性に気づく】ことができていた。さらには、〈地域全体で健康意識を高めることが大切であると気づく〉〈地域活動が高齢者の生きがい作りにつながることに気づく〉〈高齢者の力を活かすことの必要性に気づく〉など【地域全体での取り組みが高齢者の健康の維持増進につながると気づく】こともできていた。看護学生は高齢者との交流を通して、看護職が地域に向いて地域を知る必要があることや、地域住民同士のつながりを大切にすることが必要であること、若者世代との交流の場は高齢者の力が発揮できる場所となることなどに気づくことができる、ということである。地域の活動に参加している人は、健康意識が高いこと¹⁵⁾が報告されており、地域全体で取り組むことが高齢者の健康の維持・増進に効果的に働くといえる。看護学生にとって世代間交流は、高齢者への健康支援に対する理解が深まる効果的な活動であると考えられる。

加えて、〈高齢者は加齢に伴う変化や疾病を受け入れる努力をしながら、さらに楽しみを見つけて生活している〉〈様々な人生経験があるからこそ英知が得られると気づく〉などの【活動を通して高齢者の強さを感じることができる】、〈地域で暮らす高齢者の多様性に気づく〉などの【活動を通して高齢者の個性を知ることができる】を感じることができていた。「強さ(ストレングス)」とは、本人自身の能力、願望、自信の他、その人を取り巻く人間関係、様々な機会の存在、社会資源、地域環境などの幅広い内容を持つ¹⁶⁾ものである。高齢者との交流経験の少ない若年層は、加齢に伴う高齢者のネガティブな側面に目が行きがちであり「強さ」を見出すことは難しいが、相互交流を行うことで高齢者自身の力や、高齢者を支える地域資源に目を向けることができていた。これらのことから高齢者との交流の機会を持つことにより、高齢者の持つ強さや個性

に気づき、座学での学びを深化させることができるといえる。世代間交流は高齢者に対する理解を深めるための効果的な学修方法であるといえる。

高齢者側では【高齢者自身が有用感を抱く機会となる】【高齢者自身が健康への期待ができる】という効果が挙げられた。エリクソンの述べる老年期の発達課題は自我の統合と絶望であり、自我の統合を促すうえで家庭や地域に対して人生や社会についての伝承をすることや、人生の振り返りを行うことが大切である。高齢者は、「人生の歩みの自己肯定感（学生のライフインタビューからの学びの発表を聞いて個人として自分が行ってきたことが間違いでない）」（〈人生の歩みに対する自己肯定につながる〉）、「今後も授業に参加していきたい（自分が元気なうちは、協力していかないと、面倒は見えないと思う）」（〈活動を通して若者を育てたいと思う〉）など、看護学生との相互交流を通して【高齢者自身が有用感を抱く機会となる】と感じていた。看護学生に対して自らの経験やこれまでの人生で培ってきた知識などを伝えることを通して、今までの人生の振り返りを行うと同時に、自分たちの経験を伝えることが看護学生の将来につながるという思いを持つことができるといえる。看護学生との世代間交流の機会を作ることは、高齢者にとって老年期の発達課題の達成につながる活動となると考えられた。

5-2 活動内容による効果の違い

看護学生にとって【看護学生が人（地域）同士のつながりについて知る機会となる】【看護学生（看護職）が地域に出向くことの必要性に気づく】【地域全体での取り組みが高齢者の健康の維持増進につながると気づく】などは、看護学生が地域を知り、必要な看護を考える上で重要な気づきである。これらの気づきは『A: 看護学生が地域資源となる活動』や『B: 看護学生が高齢者の健康増進を支援する活動』など、看護学生が自ら地域に向いて高齢者と交流する活動、在宅高齢者の健康を支援する活動で得られていた。馬場ら⁹⁾は、「看護学生が高齢者の生活する生活圏に向いたボランティア活動を行うことで、地域における高齢者の健康ニーズや生活の中で行われる保健活動を知る機会となった」と述べ、安仁屋ら¹⁷⁾は「学生が地域に出ることで、看護学生として地域住民の健康に対する意識付けの方法を考えることができていた」と述べている。「地域の情報を得ることができ、活性化について考えた」「地域に密着した看護活動（地域特有の病気や生活習慣が分かりやすくなると思う）」（〈地域の概要やその地域特有の課題について知る〉）という記述からも、高齢者の生活圏において、看護学生と高齢者が交流することで、看護学生がより高齢者のニーズや課題を的確に把握することができると考える。加えて看護

学生が将来、より良い高齢者看護の実践者となるためには、高齢者の持つ強さに目を向けられるということは重要である。活動内容に関わらず看護学生は、交流を通して高齢者の「強さ」への気づきを得ていることから、交流の場を持つ、ということ自体に意味があるといえる。

一方で大学内において、『C: 高齢者が看護学生の学修に協力する活動』では〈様々な人生経験があるからこそ英知が得られると気づく〉〈看護学生が高齢者とのコミュニケーションにおいて大切なことを学ぶ〉などの効果はあったが、看護学生（看護職）が地域に出向く大切さへの気づきは得られていなかった。よって高齢者への理解やコミュニケーション技術の修得を目的とする場合は大学内の演習等で高齢者から話を伺う機会を設定する、地域の理解や地域活動への理解を促すことを目的とする場合は学生が地域に出向き高齢者と交流する場を設定するなど、目的に合わせて内容を企画することでより効果的な交流の場となると考える。

高齢者側から見ると、【高齢者自身が有用感を抱く機会となる】【高齢者自身が健康への期待ができる】【若者に対する理解が深まる】という効果が得られていた活動は、看護学生が高齢者に対してライフヒストリーインタビューを実施するといった『C: 高齢者が看護学生の学修に協力する活動』であった。阪本 18) は、高齢者が「今日の社会の中の最年長者として、若年者が将来を担う責任ある大人になるための指導に貢献すること、そして、そのために信頼たりうる人物となろうとすることは、祖父母的生殖性をもたらす機能である。」と述べている。「大学と協力して地域で学生さんを育てていきたい」（〈活動を通して若者を育てたいと思う〉）とあるように、高齢者が人生の先輩として自らの経験を語り、看護学生の成長を助ける役割を担うことは、高齢者にとって祖父母的生殖性を発揮する機会になるといえる。高齢者と看護学生が相互交流することは双方にとってよい効果が期待できるが、祖父母的生殖性を発揮できるような活動内容を検討することによって、高齢者にとってより効果的な交流の場になると考えられた。

以上より看護基礎教育において、地域高齢者と看護学生の世代間交流の機会を持つことは、看護学生の高齢者看護の実践に必要な知識や技術の修得が期待できると同時に、高齢者にとっても老年期の発達課題の達成につながる効果的な支援となることが示された。

6. 結論

地域高齢者と看護学生との世代間交流の効果と、活動内容による効果の違いを明らかにするために、文献検討を行なった。その結果、次のことが明らかになっ

た。

- ・看護学生は、高齢者との世代間交流を行うことで、【看護学生（看護職）が地域に出向くことの必要性に気づく】【地域全体での取り組みが高齢者の健康の維持増進につながると気づく】など、看護学生としての学びの深化を得ることができていた。また、【活動を通して高齢者の強さを感じることができる】【活動を通して高齢者の個別性を知ることができる】などの、高齢者の強さや個別性を見出すことができていた。高齢者側では、【高齢者自身が有用感を抱く機会となる】【高齢者自身が健康への期待ができる】などの効果を感じていた。
- ・活動内容別の効果としては、看護学生は自らが地域に出向く活動や高齢者の健康増進を支援する活動などを通して、地域に対する理解や、地域活動に対する必要性への理解が深まっていた。活動内容に関わらず、高齢者との世代間交流を通して高齢者の「強さ」への気づきを得ていた。高齢者は、看護学生に知識や経験を伝える活動や協働する活動から、有用感や健康への期待などを得ていた。

本研究の内容は、日本看護研究学会中国・四国地方会 第34回学術集会で発表した。

本研究では、開示すべき利益相反はない。

文献

- 1) 財務省：1. 高齢者の人口. 総務省統計局, (オンライン) 入手先 <<https://www.stat.go.jp/data/topics/topi1211.html>> (参照 2019-9-15)
- 2) 一原由美子, 波止千恵ほか：地域の高齢者と大学生による異世代間交流. 純真学園大学雑誌, 7: 9-13, 2018
- 3) 木林身江子：高齢者ケアにおける世代間交流の現状. 静岡県立大学短期大学部研究紀要, 19-W (Web版): 113, 2005
- 4) 山崎美佐子, 角間陽子ほか：異世代間におけるネットワークの可能性—祖父母と孫の交流関係から. 信州大学教育学部紀要, 112: 99-110, 2004
- 5) 佐藤敏子：老年看護学教育において世代間交流を学ぶ意義. 老年看護学, 10(2): 77-84, 2006
- 6) 岡和子, 太湯好子ほか：地域高齢者と看護学生及び児童との世代間交流プログラムの実践報告—看護学生の交流会への参加と高齢者観の視点から—. 吉備国際大学研究紀要 (医療・自然科学系), 26: 51-62, 2016
- 7) 張平平, 大塚真理子ほか：看護学生と地域高齢者との世代間交流がもたらした成果—文献研究を通して—. 埼玉県立大学紀要, 12: 54-61, 2016

- 8) 厚生労働省：2005年度介護保険法改正(2005). 厚生労働省, (オンライン) 入手先
<<https://www.mhlw.go.jp/topics/kaigo/gaiyo/k2005.html>> (参照 2019-9-15)
- 9) 馬場保子, 中村美香ほか：学生と地域を繋ぐプロジェクト—高齢者ケアに関するボランティア活動の実践報告—, 活水論文集看護学部編, 6: 18-23, 2020
- 10) 讃井真理, 今坂鈴江ほか：山間地域在住の高齢者との交流における看護学生の世代性及び対人援助力への影響. 看護学統合研究, 20(2): 10-24, 2019
- 11) 林裕栄, 武田美津代ほか：地域高齢者と看護学生の世代間交流に関する研究. 保健医療福祉科学, 7: 59-65, 2018
- 12) 森幸弘, 福田峰子ほか：看護大学生の高齢者に対するエイジズムとイメージの変化—チャレンジサイト活動による高齢者とのふれあい交流から—, 中部大学生命健康科学研究所紀要, 13: 81-88, 2017
- 13) 松田武美, 福田峰子ほか：看護学生・高齢者世代間交流による相互学習の取り組みの効果 ライフストーリーインタビューによる傾聴体験を通して. 中部大学生命健康科学研究所紀要, 12: 54-61, 2016
- 14) 土井英子, 金山時恵ほか：ITを活用した山間地域の在宅高齢者と看護学生とのコミュニケーション—在宅高齢者への健康・生活相談を通しての学び—, 新見公立短期大学看護学科, 27: 137-144, 2006
- 15) 魚里明子, 森田智子ほか：P市県民交流広場参加者の保健行動と健康意識の実態調査. 関西看護医療大学紀要, 5(1), 28-36: 2013
- 16) 堀内ふき, 大淵律子ほか 編者：老年看護学①高齢者の健康と障害. 東京, 株式会社メディカ出版, 153, 2018
- 17) 安仁屋優子, 永田美和子ほか：健康支援活動ゆんたくしながら健康づくり in 名護市場の実践報告. 名桜大学紀要=THE MEIO UNIVERSITY BULLETIN, 22: 101-105, 2017
- 18) 阪本陽子：高齢期の社会化における「語り」の意義. 教育研究所紀要, 14: 73-78, 2005

A literature review on the effect of intergenerational interaction between nursing students and older adults and activity contents

Risa NIHEI^{*1} Yoko WATANABE^{*2} Yuko SHINAGAWA^{*2}
Michiyo YAMANAKA^{*2}

*1 National Hospital Organization Fukuyama Medical Center

*2 Prefectural University of Hiroshima

Received August 31, 2021

Accepted December 16, 2021

Abstract

A literature review was conducted to clarify the effects of intergenerational interaction between nursing students and community-dwelling older adults and activity-related differences in such effects. We searched articles published between 2005 and 2020 using the following combination of keywords: “older adults,” “nursing students,” and “interaction” and “community,” “older adults,” “interaction,” and “nursing students.” From the eight articles identified, descriptions of the effects of interaction were extracted and analyzed using qualitative integration. The effects of interaction on nursing students were classified into seven categories, including “discovering older adults’ strengths through activities in the community,” and those on older adults were classified into three categories, including “developing a sense of being useful.” When focusing on the effect of each activity content, the experience of visiting and participating in the community, supporting the health of older adults, and working together with them helped students gain a better understanding of community activities. Regardless of the content, all the activities effectively promoted students’ awareness about the strength and individuality of older adults. Older adults developed a sense of being useful and health expectations from the activities of sharing their knowledge and experience and collaborating with students. The results suggest that when planning opportunities for intergenerational interaction, the content should be designed according to its purpose to make it more effective.

Key words: community-dwelling older adult, nursing student, intergenerational interaction, effect